

ストーキングに関する研究動向と課題

| | |
|----------|---|
| 著者 | 城間 益里, 松井 豊, 島田 貴仁 |
| 雑誌名 | 筑波大学心理学研究 |
| 号 | 54 |
| ページ | 39-50 |
| 発行年 | 2017-08-25 |
| その他のタイトル | A literature review of stalking research and future issues |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00148319 |

ストーキングに関する研究動向と課題

筑波大学大学院人間総合科学研究科 城間 益里

筑波大学人間系 松井 豊

科学警察研究所 島田 貴仁

A literature review of stalking research and future issues

Mari Shiroma (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Takahito Shimada (*National Research Institute of Police Science, Kashiwa 277-0882, Japan*)

This paper presents an overview of psychological research into stalking and discusses some future issues for Japan. We review research on stalking since the 2000s but exclude review articles and case studies. Previous studies have focused on groups such as college students, general citizens, clinic staff members and police officers. We highlight four aspects of the research literature. First, one can observe confusion over various definitions, such as romantic relationships, fear, stalker intent and repeated behaviors. Second, estimates of stalking prevalence rates vary widely from 2.2% to 87%. Third, research that focuses on risk factors indicates that stalking is associated with demographics, romantic relationships, personality and victim lifestyle. Finally, few studies have addressed coping strategies and seeking help. There is a lack of research into stalking within Japan. Taking these factors together, future research needs to clarify the definitions of stalking, conduct psychological studies of stalkers and their victims and to explore the risk factors within Japan.

Key words: stalking, obsessive relational intrusion, cyberstalking, romantic relationships, break up, broken heart.

海外のストーキング研究の動向

海外のレビュー論文

欧米では、1989年に女優のレベッカ・シェーファーが、ファンに銃殺されたことによってストーカーに対する注目が急速に高まった (Coleman, 1997)。その後、1990年に世界で初めての反ストーキング法がカリフォルニア州で成立し、ストーキングに関する研究が盛んに行われるようになった。

Spitzberg & Cupach (2007) では、1993年から

2006年までの175のストーキング研究について、レビューを行っている。同レビューでは、ストーキング研究をストーキングの特徴、被害率、ストーキング行動内容、被害者の対処行動、被害者に与える影響とストーキング理論の研究に整理している。

Spitzberg & Cupach (2007) は、第一に、ストーキングの特徴として、定義の難しさに触れ、法律的定義と自己定義での被害率が異なることや、ストーキングが多様な方法、動機によって引き起こされること、ストーキングと強迫的関係侵害との明確な違いをつけずに測定している研究が多く存在することを指摘した。特に、ストーキング加害を行う動機に

について調査をしている24の研究について分類を行い、親密化動機や、攻撃動機、精神障害的な動機、仕事上の争いによる動機に整理した。

第二に、被害率は、上述の定義の難しさから、様々な定義によって多様な方法とサンプルから被害率が導出されていることを明らかにした。Cupach & Spitzberg (2004) によると、推定された生涯被害率の範囲は、男性2~13%、女性8~32%であった。その他、研究全体を通して、女性の方がストーキング被害に遭いやすいことや、ストーキング継続期間の研究をしている28研究において、継続期間の平均が22ヵ月であることを明らかにした。また、175研究のうち、80%以上が元交際相手や友人、知人などの被害者が知っている人からの行為であり、メディアによって作られた「ストーカーは、妄想性の高い見知らぬ人である」というステレオタイプと実態は、異なっていることを指摘した。

第三に、ストーキング行動の内容を、過度の親密行動、メールや電話による接触、直接の接触、監視、侵入、ハラスメントや脅し、強制や強迫、攻撃の8つのまとまりに整理した。その中で、脅迫行動について調査した54の研究のうち、大学生や一般市民の被害者よりも、シェルターや病院にいる被害者の方が、ストーキング行為者から脅迫行動を受けていることを明らかにし、脅迫行動が被害者に大きな心的ダメージを与えることを指摘した。また、82の研究における、身体的暴力の被害率が32%、性的暴力の被害率が12%であることを明らかにした。

第四に、被害者の対処行動を、Moving with (交渉など)、Moving against (攻撃など)、Moving away (逃避など)、Moving inward (否定、再定義など)、Moving outward (第三者に相談するなど)の5つの独自のまとまりに整理している。また、接近禁止命令や保護命令を適用した被害者に関する40の研究のうち、回答者の4割が、命令が守られなかったことを報告し、同時に回答者の4分の1は、ストーカーに対する行政的な命令によって、かえって状況が悪化したと報告していた。

被害者に与える影響は、心的トラウマや抑うつ気分、自己肯定感の減少など精神症状への影響などに整理された。

最後に、ストーキングや強迫的關係侵害を説明する理論として、アタッチメント理論や関係目標遂行理論による解釈を行った。

本研究における文献検索

Spitzberg & Cupach (2007) を踏まえ、本研究では2000年以降の英語文献で、計量的な実証研究を調査対象にし、ストーキング研究の動向を整理する。具体的には、PsycINFOの雑誌記事検索のデータを用いて、ストーキングに関する査読付きの文献数を確認した。PsycINFOでは、2000年以降の英語文献の中で、キーワードに“stalking”を含む文献を検索した。検索結果には、“stalking”、“obsessive relational intrusion”、“harassment”、“unwanted pursuit behaviors”の語句を含む文献が見出された。検索結果に含まれた強迫的關係侵害 (obsessive relational intrusion; ORI) とは、「ある人間との親密な関係を希求する (または前提とする) 非面識者または面識者による、被害者が望まない反復的な (物理的、象徴的双方の) プライバシーの侵害行為」と定義される (Cupach & Spitzberg, 2000)。ストーキングと強迫的關係侵害とは概念の大部分が重なっている (Chapman & Spitzberg, 2003) ため、検索された強迫的關係侵害の文献をそのままストーキング文献として数えた。その結果、714件の文献が見出された。PsycINFOで検索された文献のうち、英語で記述されていない文献や、ストーキングとは直接関係の無い文献 (家庭内暴力 (domestic violence; DV) や、親密者間暴力 (intimate partner violence; IPV) のみに言及している文献など) を除くと、433件の文献が見出された。また、本研究では、ストーキングに関する計量的な実証研究を対象とするために、レビュー論文や、論説、事例研究を除いた。その他、2000年以降のレビュー論文 (Nicastro, Cousins, & Spitzberg, 2000; Spitzberg & Cupach,

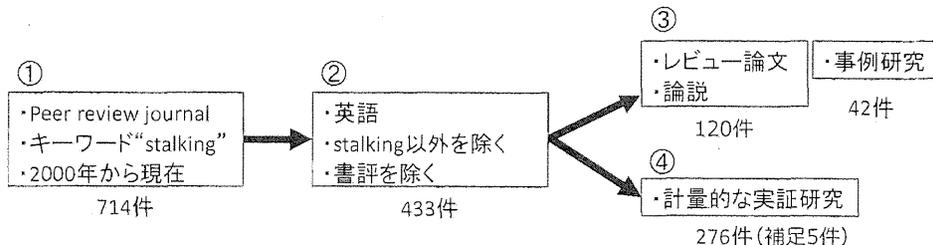


Figure 1. PsycINFOでの文献検索方法

2003; 2007) において紹介されていたが、検索されなかった文献や、“cyberstalking”に関する論文を補足した結果、ストーキングに関する計量的な実証研究は、276件であった (Figure 1)。

文献全体の概観

276件の文献の研究目的は、ストーキングの定義の明確化や、ストーカーの類型化、被害率・加害率の調査、リスクファクターの解明、被害者の対処行動、被害者への心的影響などであった。

ストーキングに関するレビュー論文や事例研究を含めた文献発表年次別に整理すると、毎年20~30件のストーキング研究が行われており、その中でサイバーストーキング研究が占める割合は増加傾向にあった (Figure 2)。

検索された文献全体から、レビュー論文や論説、事例研究を除いた計量的な実証研究の研究内容を分析した結果、学生を対象にした研究は93件、一般市民を対象にした研究は78件、病院スタッフや警察官、政治家、弁護士などの専門家を対象にした研究は41件であった。また、加害者を対象にした研究は76件、被害者を対象にした研究は150件、加害者と被害者の両方を対象にしている研究は15件、ストーキング定義の研究などを目的とした、加害者や被害者を対象としない研究は19件であった。病院スタッフや警察官などの専門家の被害実態を調査した研究が29件であった。被害者対象の研究は、加害者対象

の研究よりも多くなっていた (Table 1)。

ストーキングの定義の問題

ストーキングの捉え方は、研究者や国によって異なり、これまで、様々なストーキングの定義が提出されてきた。そのため、現時点ではストーキングに関して統一された定義は存在しておらず、研究者によるストーキングの捉え方には以下の点において混乱がみられる。

第一に、失恋後の未練行動とストーキングを分ける境界線が、曖昧な点である。ストーキングの法規制や法施行は国や州によって異なるため、どこからがストーキングで、どこまでは異性に対する恋愛アプローチであるかの線引きは、困難である。

第二に、定義をする際に、ストーキングの行動、あるいは、行動が被害者に与える感情反応のどちらに焦点をあてるかという点である。恐怖などの感情

Table 1
ストーキング文献の研究対象者

| | 学生 | 一般 | 専門家 | 警察 事案 |
|---------|----|----|-----|----------|
| 加害者 | 34 | 11 | 0 | 46 |
| 被害者 | 52 | 58 | 29 | 26 |
| 加害者・被害者 | 12 | 3 | 0 | - |
| どちらでもない | 19 | 12 | 12 | - |

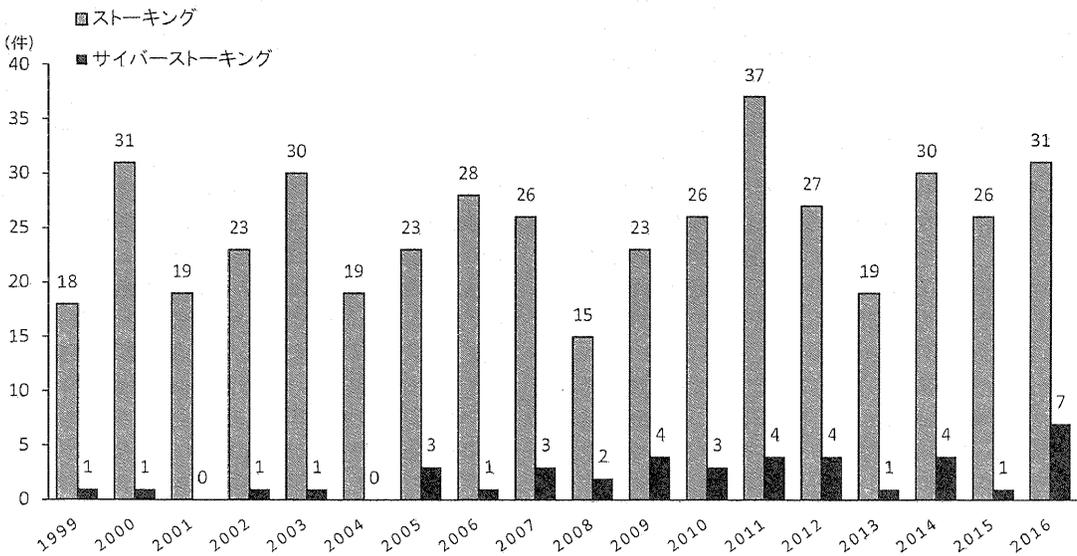


Figure 2. ストーキングとサイバーストーキングの英語文献

注：この表で用いた文献は、PsycINFO で査読付きの“stalking”, “cyberstalking”の文献検索結果から、英語文献以外を除いたものであり、レビュー論文や事例研究が含まれている。Figure 1②の433件を用いた。

反応に焦点をあてると、被害者が感じた恐怖の有無によって被害率が大きく異なるという問題が生じる。

第三に、ストーキング行為者の故意や悪意の感情を定義に含めるかという点である。故意でなくとも、各国のストーカー規制法に触れる行為者は存在する。

第四に、ストーキングの行為の反復や、頻度、継続期間を具体的に特定するかという点である。定義に、「反復」を含むものや、具体的に「2回以上」や「2週間継続するもの」などと定めている定義が存在する。しかし、1回の行動でも命の危険を感じるようなストーキングは存在する。

このように、ストーキングの定義には混乱があり、定義が定まっていないため、本研究のストーキングに関する計量的な実証研究276件の中で扱われている定義を、内容の類似性に基づいて分類して紹介する。

第一に、恋愛関係に焦点をあてた定義がある。Langhinrichsen-Rohling, Palarea, Cohen, & Rohling (2000) は、ストーキングを「両者が好意感情を持っていないのに(片思い)、無理やり恋愛関係をもとうとして行う迷惑なつきまとい」と定義している。この定義では、恋愛関係をもとうとしている者のみが定義の対象であり、失恋した事に対する怒りや復讐の念から行われる、交際や復縁などを望まないストーキングは含まれない。このような恋愛関係のみに焦点をあてた定義を用いた文献は、29件であった。

第二に、ストーキング被害者の恐怖感や不安感などの感情反応に焦点をあてた定義がある。Lewis, Fremouw, Del Ben, & Farr (2001) では、ストーキングを「侵害的で迷惑な行為であり、被害者に対し、不安や恐怖などの感情反応を生起させ、被害者や周辺者の安全に対する脅威となる反復的行動」と定義している。これらの定義では、行為を受けて不安や命の危険を感じることがストーキング定義の要件である。このような感情反応に焦点をあてた定義を用いた文献は、74件であった。

第三に、加害者側の意図に焦点をあてた定義がある。Diette, Goldsmith, Hamilton, Darity, & McFarland (2014) では、ストーキング加害を「故意で悪意のあるつきまとい」と定義している。このような意図に焦点をあてた定義を用いた文献は、11件であった。

第四に、ストーキングの継続期間や頻度に焦点をあてた定義がある。先述した強迫的関係侵害をストーキングの定義として用いた文献 (Cupach &

Spitzberg, 2000; Spitzberg, Marshall, & Cupach, 2001) や McFarlane, Campbell, & Watson (2002) では、「理性的な人ならば恐怖を感じるであろう行動、それを2回以上くりかえすこと」などと定義しており、行為を反復していることが要点である。このような継続期間や頻度に焦点をあてた定義を用いた文献は、102件であった。

第五に、回答者自身の自己定義による定義がある。世論調査などの大規模サンプルを用いた調査では、その国や州のストーキング規制法によるものや、自己定義によるものがある。自己定義の例として、「ストーキングの被害にあったことはありますか。」や「ストーキングを行ったことはありますか。」という質問に対して、回答者の持つ「ストーキング」のイメージによって回答された行為を、ストーキングと定義している研究が存在する (Sheridan & Roberts, 2011)。国や州の規制法も、用いている定義が国や州ごとに異なるために、様々な「ストーキング」が測定されてきた。このような自己定義を用いた文献は、26件であった。

ストーキング被害実態

ストーキングの被害実態は、各研究の定義や測定方法によって異なっている。検索された276の文献のうち、被害実態について扱った実証的研究は、118件であった。118件の中で、被害率を導出している研究は、63件であった。

被害率を導出している研究を見ると、大学生を対象としている被害率の研究が26件、一般人口を対象としている研究が18件、病院の精神科医や警察官などの専門職を対象としている研究が19件であった (Table 2)。

また、生涯被害を測定した研究 (Dressing, Kuehner, & Gass, 2005) と、過去1年間や過去5年間の被害を測定した研究が存在した (Narud, Friestad, & Dahl, 2014)。各研究の被害率は、大学生を対象とした研究では3%から78%、一般市民を対象とした研究では6.1%から64%、専門家自身の被害経験を対象とした研究では2.2%から87%と、どの研究対象の被害率も幅広く示されていた。

被害実態を扱った118件の文献の研究内容は、男性の加害行為や、元交際相手からのストーキング被害を調査している文献が多く、ストーキング中のつきまとい行為だけでなく、身体的暴力や精神的暴力に焦点をあてた研究が存在した (Sheridan & Roberts, 2011)。また、女性の加害行為に焦点をあてた研究も存在した (Thompson, Dennison, & Stewart,

2012)。

なお、近年、若者の間のストーキング被害においては、インターネット上でのストーキングであるサイバーストーキング(“cyberstalking”)が問題となっている(Spitzberg, 2002)。PsycINFOで、サイバーストーキングをキーワードとして検索すると、初めて実証的に研究されたのは1999年であった(Deirmenjian, 1999)。“cyberstalking”の語句を含む査読付き論文は41件あり、2005年から毎年1件~7件の研究がなされていた(Figure 2)。これは、インターネットが誰にでも使用、閲覧できるようになったことが影響していると考えられる。

リスクファクター

276件の文献のうち、ストーキング被害や加害のリスクファクターについて扱っている実証的研究は、83件であった(Table 3)。

欧米の研究では、加害者のデモグラフィック要因に焦点をあてた文献が多く、犯罪歴や薬物乱用とストーキング加害との関連が主張されてきた(Eke, Hilton, Meloy, Mohandie, & Williams, 2011)。この

ようなデモグラフィック変数をリスクファクターとして示した研究は、21件であった。

2000年以前の、ストーキングがセレブ芸能人の熱狂的なファンと認識されていた頃(Melton, 2000)は、ストーキング加害のリスクファクターは、加害者の属性としてエロトマニア(Erotomania: 被愛妄想)が多くあげられてきた。しかし、2000年以降の文献では、交際中のデート暴力(Davis, Ace, & Andra, 2000)や交際期間の長さ(Mechanic, Weaver, & Resick, 2000)が離別後のストーキング被害と関連があることなど、恋愛中の関係性に注目した研究が多くなっている。このように恋愛中の関係性をリスクファクターとして示した研究は、25件であった。

2000年以前の研究からリスクファクターとして示されてきた加害者のパーソナリティの特性については、現在でも、アタッチメントの不安定さ(Patton, Nobles, & Fox, 2010)や境界性パーソナリティ障害(Meloy & Boyd, 2003)などのパーソナリティがリスクファクターとして示されており、このような研究が29件あった。ただし、精神疾患とストーキング加害との関連は弱いとの指摘もあった(Rosenfeld,

Table 2
被害実態を取り扱った研究の被害率

| 著者 | 年 | 被害率 | 大学生 | 一般 | 専門家 |
|-----------------------------|------|-------|-----|----|-----|
| Cupach & Spitzberg | 2000 | 3~78% | ○ | | |
| Logan & Leukefeld et al. | 2000 | 27.0% | ○ | | |
| Bjerregaard | 2000 | 25.0% | ○ | | |
| Kohn & Flood et al. | 2000 | 15.0% | ○ | | |
| Tjaden & Thoennes et al. | 2000 | 12.1% | | ○ | |
| Spitzberg & Marshall et al. | 2001 | 40.0% | ○ | | |
| Sheridan & Davies et al. | 2001 | 24.0% | | ○ | |
| Sandberg & McNiel et al. | 2002 | 53.0% | | | ○ |
| Roberts | 2002 | 34.4% | ○ | | |
| Purcell & Pathé et al. | 2002 | 23.4% | | ○ | |
| Sheridan & Gillett et al. | 2002 | 5.2% | | ○ | |
| Jagessar & Sheridan | 2004 | 27.0% | | ○ | |
| Chapman & Sitzberg | 2004 | 20.0% | ○ | | |
| Roberts | 2005 | 35.9% | ○ | | |
| Roberts | 2005 | 34.4% | ○ | | |
| Purcell & Powell et al. | 2005 | 19.5% | | | ○ |
| Dressing & Kuehner et al. | 2005 | 12.0% | | ○ | |
| Galezzi & Elkins et al. | 2005 | 11.0% | | | ○ |
| Hudson-Allez | 2006 | 48.0% | | | ○ |
| Basile & Swahn et al. | 2006 | 4.5% | | ○ | |

注：年は発行年を表し、大学生・一般・専門家は、研究対象者を表す。

Table 2
被害実態を取り扱った研究の被害率(続き)

| 著者 | 年 | 被害率 | 大学生 | 一般 | 専門家 |
|------------------------------------|------|-------|-----|----|-----|
| Amar | 2007 | 32.0% | ○ | | |
| Jordan & Wilcox et al. | 2007 | 18.0% | ○ | | |
| Stieger & Burger et al. | 2008 | 11.0% | | ○ | |
| Thomas & Purcell et al. | 2008 | 11.7% | | ○ | |
| van der Aa & Kunst | 2009 | 16.5% | | ○ | |
| Jones & Sheridan | 2009 | 42.2% | | | ○ |
| Buhi & Clayton et al. | 2009 | 26.9% | ○ | | |
| Gass & Martini et al. | 2009 | 2.2% | | | ○ |
| Amar & Alexy | 2010 | 26.3% | ○ | | |
| Björklund & Häkkinen-Nyholm et al. | 2010 | 22.3% | ○ | | |
| Kraft & Wang | 2010 | 9.0% | ○ | | |
| Winkelman & Winstead | 2011 | 67.8% | | | ○ |
| Morgan & Kavanaugh | 2011 | 25.4% | | | ○ |
| Whyte & Penny et al. | 2011 | 21.0% | | | ○ |
| Sheridan & Roberts | 2011 | 8.0% | ○ | | |
| Reyns & Henson et al. | 2012 | 40.8% | ○ | | |
| Nwachukwu & Agyapong et al. | 2012 | 25.1% | | | ○ |
| McNamara & Marsil | 2012 | 12.0% | ○ | | |
| Nobles & Fox | 2013 | 25.9% | ○ | | |
| Wooster & Farnham et al. | 2013 | 20.0% | | | ○ |
| Edwards & Gidycz | 2014 | 51.8% | ○ | | |
| Betsos & Marchesi | 2014 | 37.3% | | | ○ |
| Maran & Varetto et al. | 2014 | 20.0% | ○ | | |
| Fisher & Coker et al. | 2014 | 16.5% | ○ | | |
| Narud & Friestad et al. | 2014 | 16.0% | | ○ | |
| Maran & Varetto et al. | 2014 | 14.0% | | | ○ |
| Dresing & Bailer et al. | 2014 | 6.3% | | ○ | |
| Every-Palmer & Barry-Walsh et al. | 2015 | 87.0% | | | ○ |
| Edwards & Sylaska et al. | 2015 | 53.1% | ○ | | |
| Breiding | 2015 | 15.2% | | ○ | |
| Hellmann & Kliem et al. | 2015 | 15.0% | | ○ | |
| Kivisto & Berman et al. | 2015 | 14.0% | | | ○ |
| Sheridan & James, David V | 2015 | 12.3% | | ○ | |
| Reyns & Henson et al. | 2015 | 7.0% | | ○ | |
| Guldimann & Stieglitz et al. | 2015 | 5.2% | | | ○ |
| Pereira & Spitzberg et al. | 2016 | 66.1% | ○ | | |
| Dardis & Amoroso et al. | 2016 | 64.0% | | ○ | |
| Pereira & Matos | 2016 | 61.9% | ○ | | |
| James & Farnham et al. | 2016 | 53.0% | | | ○ |
| Clarke & Yanson et al. | 2016 | 25.4% | | | ○ |
| Reidy & Smith-Darden et al. | 2016 | 14.0% | ○ | | |
| Storey | 2016 | 7.0% | | | ○ |
| Ménard & Cox | 2016 | 6.1% | | ○ | |

注：年は発行年を表し、大学生・一般・専門家は、研究対象者を表す。

2004)。

一方、被害者側のリスクファクターの検討もなされており、被害者のライフスタイルに焦点をあてた研究が存在し、夜遅く外出することなどと被害との関連が示されている (Reyns, Henson, Fisher, Fox, & Nobles, 2016)。このような被害者のリスクファ

クターを示した研究は、9件であった。

他にも、幼少期の虐待経験 (Fox, Gover, & Kaukinen, 2009) や、両親の離婚経験がリスクファクターとしてあげられていた (Langhinrichsen-Rohling & Rohling, 2000)。

Table 3
リスクファクターを取り扱った研究のリスクファクター

| 著者 | 年 | デモ グラフィック | 恋愛関係 | パーソナリティ | 被害者 要因 | その他 |
|---|------|--------------|------|---------|-----------|-----|
| Brewster | 2000 | ○ | | | | |
| Farnham & James et al. | 2000 | | ○ | ○ | | |
| Langhinrichsen-Rohling & Rohling | 2000 | | | | | ○ |
| Langhinrichsen-Rohling & Palarea et al. | 2000 | | ○ | | | |
| Logan & Leukefeld et al. | 2000 | | ○ | | | |
| Mechanic & Weaver et al. | 2000 | | ○ | | | |
| Meloy & Rivers et al. | 2000 | ○ | | ○ | | |
| Tjaden & Thoennes | 2000 | | | | | |
| Lewis & Fremouw et al. | 2001 | | | ○ | | |
| Meloy & Davis et al. | 2001 | | ○ | | | |
| Morewitz | 2001 | | | | ○ | |
| Sheridan & Davies | 2001 | | ○ | | | |
| Spitzberg & Marshall et al. | 2001 | | | | ○ | |
| McFarlane & Campbell et al. | 2002 | | | | ○ | |
| Rosenfeld & Harmon | 2002 | | | | | |
| Dye & Davis | 2003 | | | ○ | | |
| James & Farnham | 2003 | ○ | ○ | | | |
| Jasinski & Dietz | 2003 | | ○ | | ○ | |
| Meloy & Boyd | 2003 | | | ○ | | |
| Rosenfeld | 2003 | ○ | | ○ | | |
| Slashinski & Coker et al. | 2003 | | | | | |
| Groves & Salfati et al. | 2004 | | ○ | | | |
| Kamphuis & Emmelkamp et al. | 2004 | | | | | |
| Tonin | 2004 | | | | | |
| Alexy | 2005 | ○ | ○ | | | |
| Purcell & Pathe et al. | 2005 | | | | | |
| Roberts | 2005 | ○ | ○ | | | |
| Rosenfeld & Lewis | 2005 | | | | | |
| Williams & Frieze | 2005 | | | | | |
| Dennison & Stewart | 2006 | | | | | |
| Dutton & Winstead et al. | 2006 | | | ○ | | |
| Hudson-Allez | 2006 | | | ○ | | |
| McCutcheon & Scott et al. | 2006 | | | ○ | | |
| Dietz & Martin | 2007 | | | | | |
| Melton | 2007 | ○ | ○ | | | |
| Roberts | 2007 | | | ○ | | |
| Spitzberg & Veksler | 2007 | | | ○ | | |
| Whyte & Petch et al. | 2007 | | | | | |

Table 3
 リスクファクターを取り扱った研究のリスクファクター (続き)

| 著者 | 年 | デモ グラフィック | 恋愛関係 | パーソナリティ | 被害者 要因 | その他 |
|------------------------------------|------|--------------|------|---------|-----------|-----|
| MacKenzie & Mullen et al. | 2008 | | | ○ | | |
| McEwan & Mullen et al. | 2008 | ○ | | | | |
| Morrison | 2008 | | ○ | | | |
| Reavis & Allen et al. | 2008 | | | ○ | | |
| Thomas & Purcell et al. | 2008 | ○ | ○ | | | |
| Whyte & Petch et al. | 2008 | ○ | | | | |
| Fox & Gover et al. | 2009 | | | | ○ | |
| McEwan & Mullen et al. | 2009 | ○ | | | | |
| McEwan & Mullen et al. | 2009 | ○ | ○ | | | |
| Purcell & Flower et al. | 2009 | | ○ | | | |
| Storey & Hart et al. | 2009 | | | ○ | | |
| Björklund & Häkkinen-Nyholm et al. | 2010 | ○ | | | | |
| James & McEwan et al. | 2010 | | | ○ | | |
| Kraft & Wang | 2010 | | | | ○ | |
| MacKenzie & James et al. | 2010 | ○ | | | | |
| Patton & Nobles et al. | 2010 | | | ○ | | |
| Basile & Hall | 2011 | ○ | | | | |
| Cupach & Spitzberg et al. | 2011 | | ○ | | | |
| De Smet & Buysse et al. | 2011 | ○ | | | | |
| Eke & Hilton et al. | 2011 | ○ | | ○ | | |
| Fox & Nobles et al. | 2011 | | | | | ○ |
| Logan & Cole | 2011 | | ○ | | | |
| Norris & Huss et al. | 2011 | ○ | | ○ | | |
| Reyns & Henson et al. | 2011 | | | | ○ | |
| McEwan & MacKenzie et al. | 2012 | | ○ | | | |
| Menard & Pincus | 2012 | ○ | | ○ | | ○ |
| Strand & McEwan | 2012 | | | ○ | | |
| Ferreira & Matos | 2013 | | ○ | | ○ | |
| Mastronardi & Pomilla et al. | 2013 | | | | | ○ |
| McEwan & Strand | 2013 | | | ○ | | |
| Reyns & Englebrecht | 2013 | | | | | ○ |
| Strawhun & Adams et al. | 2013 | | ○ | ○ | | |
| Menard & Pincus | 2014 | | | ○ | | ○ |
| Narud & Friestad et al. | 2014 | ○ | | ○ | | |
| Tassy & Winstead | 2014 | | ○ | | | |
| De Smet & Uzieblo et al. | 2015 | | ○ | ○ | | |
| Fox & Tokunaga | 2015 | | ○ | ○ | | |
| Katz & Rich | 2015 | | ○ | | | |
| Reyns & Henson et al. | 2015 | | | | ○ | |
| Lee & Young | 2016 | | | ○ | | |
| Marcum & Higgins et al. | 2016 | | | ○ | | ○ |
| Navarro & Marcum et al. | 2016 | | | | | ○ |
| Pereira & Matos | 2016 | ○ | | | | |
| Sheridan & Scott et al. | 2016 | | | | | ○ |
| Wooster & James et al. | 2016 | | | ○ | | |

対処行動・帰結

被害者の対処行動とその後の精神状態などの帰結について扱った研究は、276の文献のうち、87件であった。

被害者は、加害者や周囲の人々に対して、あるいは自身の考え方を变えるなどの自分自身に対する対処行動をとる。Cupach & Spitzberg (2000) は、強迫的關係侵害に対する対処行動として、内的に動く、外的に動く、立ち向かう、話し合う、逃避の5つを示した。Johansen & Tjørnhøj-Thomsen (2016) では、被害者が被害を受けて、家から出ないようにするなど自分の行動を制限することで、社会的に孤立することを示した。このような被害者がとった対処行動の内容を分析した研究は、19件であった。

対処行動の一つに、他者への援助要請があげられる。援助要請の研究には、主に、援助要請先に関する研究と、援助要請を決断させる要因の研究が存在する。Galeazzi, Bučar-Ručman, De Fazio, & Groenen (2009) では、一般人口のストーキング被害経験者を対象とした調査で、援助要請先を尋ね、被害者支援センターなどの相談機関への相談が最も多いことを示した。Pereira, Spitzberg, & Matos (2016) は、被害に対する恐怖が強いほど警察に通報するなどの援助要請をしやすいことを示した。このような援助要請に関する研究は、17件であった。

対処行動後の精神症状として、抑うつやストレス症状、急性ストレス障害などの関連を検討する研究が43件存在した。Edwards & Gidycz (2014) では、元交際相手からのストーキング被害が、急性ストレス障害や対人恐怖などと関連することを示した。他にも、ストーキングの期間が長引くほど、心理的なストレスになること (Galeazzi et al., 2009) や、ソーシャルサポートを受けることで、その後の精神症状を安定させることを示した (Nguyen, Spitzberg, & Lee, 2012)。研究全体を通して、被害者にとってストーキング被害の影響は大きく、長期間で深刻な影響を与えることが明らかにされていた。

また、援助要請先として公的機関を選択した者の帰結を追跡している研究も10件存在した。Constanza, Cinquegrana, Cacace, & Crapolicchio (2016) では、警察の警告措置を実施した被害者の半数が、1年後に同じ加害者から被害を受けていることを報告した。

国内のストーキング研究の動向

日本におけるストーキング研究は、事件発生によ

る社会の関心の高まりに応じて発展してきた。

日本で初めて社会的に問題になったストーカー事件は、1999年10月に埼玉県桶川市で、女子大学生が元交際相手に殺害された桶川ストーカー事件であろう。この事件がきっかけとなって、2000年にストーカー規制法が制定された。

ストーキングに関する日本での最初期の研究としては、横井ら (1998) があげられる。横井ら (1998) は、ストーキングを「特定対象者の意向を無視して意図的に違法な方法によって、損害を負わせる行為を2回以上継続すること」と定義し、この定義を満たす日本国内で発生した事件36件を収集し、行為者属性とストーキングの個別行動との関連を数量化理論第Ⅲ類で検討している。また、痴漢・ストーカー被害研究会 (2001) では、首都圏の大学生・高校生に対して調査を行い、「正当な理由がないのに、つきまといや迷惑電話などを繰り返し、相手に不安や困惑を覚えさせる行い」の生涯被害率は、高校生の男子3.7%、女子10.2%、大学生の男子6.1%、女子13.8%と報告されている。

長崎県西海市 (2011年12月)、神奈川県逗子市 (2012年11月)、東京都三鷹市 (2013年10月) で発生したストーカー事件を機に再度、ストーキングに対する社会の関心が高まった。この時期に行われた研究として、島田・伊原 (2014) や越智・喜入・甲斐・佐山・長沼 (2015) があげられる。島田・伊原 (2014) は、警察に持ち込まれた相談に関する資料 (相談記録) をコーディング・ツールによって解析し、加害者の類型化を行った。ストーキング加害者は、口頭警告でストーキングをとどまりやすい慢性型や、エスカレート型、逮捕などの深刻な事態に陥る可能性が高い急迫型などに分類されることを示した。越智ら (2015) は、未婚の男女にウェブ調査を行い、デートバイオレンスやハラメント行動の一つとしてストーキングを測定している。その結果、男性のほうが女性よりもストーキングの被害を受けることが多いことや、関係が進展するにしたがって被害が減少することを示している。

この時期に、国が初めて行ったストーキング被害率の調査として、2014年に内閣府が実施した「男女間暴力に関する調査」(平成26年度調査)がある (内閣府男女共同参画局, 2015)。3年おきに実施されている同調査では、これまでドメスティックバイオレンスやデート暴力の被害を取り上げていたが、平成26年度調査で初めてストーキング被害の項目が追加された。その結果、回答者の7.3% (男性4.0%、女性10.5%) が、特定の異性からの執拗なつきまとい等の経験を報告した。また、社会安全研究財団

(2017) によって、18-39歳の若年男女を対象に、ストーキング被害と親密関係の破綻とに焦点を当てた調査が行われ、調査に回答した1884名中155名(8.2%)が過去5年間のストーキングの被害を報告した。

このように日本におけるストーキングに関する実証的な研究はいくつか存在するものの、海外の文献と比べると、その数や研究範囲は十分とはいえない。

国内のストーキング研究の展望

以上の研究動向を踏まえて、国内のストーキング研究の今後のあり方について論じる。

第一に、海外の研究と同様に、国内の研究においてもストーキングの捉え方の混乱がみられる。現在の日本のストーカー規制法では行為が反復されることが要件であるが、実際には一度の暴力行為や関係侵害行為で恐怖を覚えることも多い。このため、大学生や一般市民の自記式調査で、自己認識の定義でストーキング被害を測定すると、被害を過大に推定し、それがストーカー規制法に触れるかどうかは識別できなくなる可能性が高い。このため、日本におけるストーキングの被害率や被害内容を正確に測定し、海外研究と比較するためには、ストーキングの行動別に被害の頻度を尋ね、かつ、それに伴う恐怖感情の生起の程度を尋ねるのが有益であろう。また、ストーキングの定義を整理したうえで、どの定義に基づいて測定するかを明確化する必要がある。

第二に、国内の研究では、ストーキングの被害実態調査が多かった。海外論文の被害実態調査の結果や、国内の被害実態では、元交際相手からのストーキング被害が最も多くなっていた(警察庁, 2016)。恋愛関係崩壊後に生じるストーキングについては、交際期間や親密度などの交際中の関係性や、失恋の仕方とストーキング被害・加害との関連を調べることで、ストーキング犯罪の予防につながる要因が示されるであろう。今後は、被害実態調査のみではなく、心理学的な研究を行うことが望まれる。

第三に、国内において、ストーキング被害者の心理的・経済的な影響を扱った研究が乏しいことがあげられる。海外の研究にも示されていたように、ストーキング被害経験は、被害者に生じるその後の抑うつや急性ストレス障害と関連があり、長期間にわたって影響を与える。国内における被害者の心理的・経済的な影響を検討することで、被害者に対して有効な支援や介入を行うことができるであろう。また、援助要請を行った被害者に対しては、援助要

請を決断した要因や、その効果性の認知を調査することで、援助要請を促す啓発活動や、援助機関の業務内容向上につながることを期待される。今後は、被害者の心理的・経済的な影響や、援助要請に関する研究を行うことが望まれる。

引用文献

- Chapman, D. E., & Spitzberg, B. H. (2003). Are you following me? A study of unwanted relationship pursuit and stalking in Japan: What behaviors are prevalent? *Bulletin of Hijiya University, 10*, 89-117.
- Coleman, F. L. (1997). Stalking behavior and the cycle of domestic violence. *Journal of Interpersonal Violence, 12*, 420-432.
- Constanza, B. A., Cunquegrana, V., Cacace, S., & Crapolicchio, E. (2016). Victim's perception of quality of help and support by the police issuing warnings orders in exintimate partner stalking cases in Italy. *Policing, 10*, 432-445.
- Cupach, W. R., & Spitzberg, B. H. (2000). Obsessive relational intrusion: Incidence, perceived severity, and coping. *Violence and Victims, 15*, 357-372.
- Cupach, W. R., & Spitzberg, B. H. (2004). *The dark side of relationship pursuit: From attraction to obsession and stalking*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Davis, K. E., Ace, A., & Andra, M. (2000). Stalking perpetrators and psychological maltreatment of partners: Anger-jealousy, attachment insecurity, need for control, and breakup context. *Violence and Victims, 15*, 407-425.
- Deirmenjian, J. M. (1999). Stalking in cyberspace. *Journal of the American Academy of Psychiatry and the Law, 27*, 407-413.
- Diette, T. M., Goldsmith, A. H., Hamilton, D., Darity, W., & McFarland, K. (2014). Stalking: Does it leave a psychological footprint? *Social Science Quarterly, 95*, 563-580.
- Dressing, H., Kuehner, C., & Gass, P. (2005). Lifetime prevalence and impact of stalking in a European population: Epidemiological data from a middle-sized german city. *The British Journal of Psychiatry, 187*, 168-172.
- Edwards, K. M., & Gidycz, C. A. (2014). Stalking and psychosocial distress following the

- termination of an abusive dating relationship: A prospective analysis. *Violence Against Women*, 20, 1383-1397.
- Eke, A. W., Hilton, N. Z., Meloy, J. R., Mohandie, K., & Williams, J. (2011). Predictors of recidivism by stalkers: A nine-year follow-up of police contacts. *Behavioral Sciences and the Law*, 29, 271-283.
- Fox, K. A., Gover, A. R., & Kaukinen, C. (2009). The effects of low self-control and childhood maltreatment on stalking victimization among men and women. *American Journal of Criminal Justice*, 34, 181-197.
- Galeazzi, G. M., Bučar-Ručman, A., De Fazio, L., & Groenen, A. (2009). Experiences of stalking victims and requests for help in three European countries. *European Journal on Criminal Policy and Research*, 15, 243-260.
- Johansen, K. B. H., & Tjørnhøj-Thomsen, T. (2016). The consequences of coping with stalking—results from the first qualitative study on stalking in Denmark. *International Journal of Public Health*, 61, 883-889.
- 警察庁 (2016). 平成27年中のストーカー事案及び配偶者からの暴力事案等の対応状況について Retrieved from <https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/stalker/seianki26STDV.pdf> (2017年2月23日)
- Langhinrichsen-Rohling, J., & Rohling, M. (2000). Negative family-of-origin experiences: Are they associated with perpetrating unwanted pursuit behaviors? *Violence and Victims*, 15, 459-471.
- Langhinrichsen-Rohling, J., Palarea, R. E., Cohen, J., & Rohling, M. (2000). Breaking up is hard to do: Pursuit behaviors following the dissolution of romantic relationships. *Violence and Victims*, 15, 73-90.
- Lewis, S. F., Fremouw, W. J., Del Ben, K., & Farr, C. (2001). An investigation of the psychological characteristics of stalkers: Empathy, problem-solving, attachment and borderline personality features. *Journal of Forensic Sciences*, 46, 80-84.
- McFarlane, J., Campbell, J. C., & Watson, K. (2002). Intimate partner stalking and femicide: Urgent implications for women's safety. *Behavioral Sciences and the Law*, 20, 51-68.
- Mechanic, M. B., Weaver, T. L., & Resick, P. A. (2000). Intimate partner violence and stalking behavior: Exploration of patterns and correlates in a sample of acutely battered women. *Violence and Victims*, 15, 55-72.
- Meloy, J. R., & Boyd, C. (2003). Female stalkers and their victims. *Journal of the American Academy of Psychiatry and the Law*, 31, 211-219.
- Melton, H. C. (2000). Stalking: A review of the literature and direction for the future. *Criminal Justice Review*, 25, 246-262.
- 内閣府男女共同参画局 (2015). 男女間における暴力に関する調査報告書 Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h26danjokan-1.pdf (2017年2月23日)
- Narud, K., Friestad, C., & Dahl, A. A. (2014). Stalking experiences and associated factors—A controlled population-based study from Norway. *Nordic Journal of Psychiatry*, 68, 347-354.
- Nguyen, L. K., Spitzberg, B. H., & Lee, C. M. (2012). Coping with obsessive relational intrusion and stalking: The role of social support and coping strategies. *Violence and Victims*, 27, 414-433.
- Nicastro, A. M., Cousins, A. V., & Spitzberg, B. H. (2000). The tactical face of stalking. *Journal of Criminal Justice*, 28, 69-82.
- 越智 啓太・喜入 暁・甲斐 恵利奈・佐山 七生・長沼 里美 (2015). 改訂版デートバイオレンス・ハラメント尺度の作成と分析 (1) ——被害に焦点を当てた分析—— 法政大学文学部紀要, 71, 135-147.
- Patton, C. L., Nobles, M. R., & Fox, K. A. (2010). Look who's stalking: Obsessive pursuit and attachment theory. *Journal of Criminal Justice*, 38, 282-290.
- Pereira, F., Spitzberg, B. H., & Matos, M. (2016). Cyber-harassment victimization in Portugal: Prevalence, fear and help-seeking among adolescents. *Computers in Human Behavior*, 62, 136-146.
- Reyns, B. W., Henson, B., Fisher, B. S., Fox, K. A., & Nobles, M. R. (2016). A gendered lifestyle-routine activity approach to explaining stalking victimization in Canada. *Journal of Interpersonal Violence*, 31, 1719-1743.
- Rosenfeld, B. (2004). Violence risk factors in stalking and obsessional harassment: A review and preliminary meta-analysis. *Criminal Justice and Behavior*, 31, 9-36.
- Sheridan, L., & Roberts, K. (2011). Key questions to

- consider in stalking cases. *Behavioral Sciences and the Law*, 29, 255-270.
- 島田 貴仁・伊原 直子 (2014). ストーカー相談記録の形態素解析と加害に影響する要因 日本行動計量学会第42回大会抄録集, 44-45.
- Spitzberg, B. H. (2002). The tactical topography of stalking victimization and management. *Trauma, Violence, and Abuse*, 3, 261-288.
- Spitzberg, B. H., & Cupach, W. R. (2003). What mad pursuit?: Obsessive relational intrusion and stalking related phenomena. *Aggression and Violent Behavior*, 8, 345-375.
- Spitzberg, B. H., & Cupach, W. R. (2007). The state of the art of stalking: Taking stock of the emerging literature. *Aggression and Violent Behavior*, 12, 64-86.
- Spitzberg, B. H., Marshall, L., & Cupach, W. R. (2001). Obsessive relational intrusion, coping, and sexual coercion victimization. *Communication Reports*, 14, 19-30.
- Thompson, C. M., Dennison, S. M., & Stewart, A. (2012). Are female stalkers more violent than male stalkers? Understanding gender differences in stalking violence using contemporary sociocultural beliefs. *Sex Roles*, 66, 351-365.
- 痴漢・ストーカー被害研究会 (2001). 痴漢・ストーカー被害に対する不安感と対処に関する研究
Retrieved from <http://www.syaanken.or.jp/?p=632>
(2017年2月23日)
- 社会安全研究財団 (2017). ストーカーの被害実態等に対する調査研究報告書
- 横井 幸久・岩見 広一・長澤 秀利・桐生 正幸・中山 誠・高村 茂 (1998). ストーカー型犯罪の研究 (2) 犯罪心理学研究, 36 (特別号), 20-21.

(受稿4月28日: 受理6月12日)